

Ⅲ

英語教育研究グループ

「小・中連携を意識した新学習指導要領における英語教育の在り方について
～英語でのやり取り・パフォーマンス評価・移行期教材の利用を中心に～」

<研究員>

佐井寺小学校	教諭	和志武 玲子
千里丘北小学校	指導教諭	佐野 彩子
藤白台小学校	教諭	永森 美智子
南千里中学校	教諭	西滝 奈美
豊津西中学校	指導教諭	吉田 昌司
山田中学校	教諭	上野 瑞穂
山田東中学校	教諭	岩田 将
千里みらい夢学園 竹見台中学校	教諭	松葉 陽子

<スーパーバイザー>

関西大学	教授	竹内 理
------	----	------

1. はじめに

平成32年度（2020年度）から新学習指導要領による小学校における外国語教育が実施されることに先駆け、本市では文部科学省の教育課程特例校制度の適用により、小学1年からの英語教育に平成23年度（2011年度）から順次取り組んでおり、平成29年度（2017年度）にはすべての小学校において実施されることとなりました。この取組を通して培われた学びや子供たちの学ぶ意欲をいかに次のステップへ繋ぐかが、吹田市で取り組む小中一貫教育における「英語力」の育成に不可欠であると考えます。

本研究グループは、「小・中連携を意識した新学習指導要領における英語教育の在り方について～英語でのやり取り・パフォーマンス評価・移行期教材の利用を中心に～」をテーマとし、グローバル化が進む社会で活躍できる国際性豊かな子供の育成をめざし、小学校において特例校を中心に取組が進んでいる「外国語活動」と中学校で育む「英語力」をいかに繋ぐか、スーパーバイザーである関西大学教授の竹内先生より、新学習指導要領移行への動きを中心とした国や府の動向や先進校（先進市）等の取組に学びながら、吹田の英語教育の充実に向けて、また「英語で話せる吹田っ子」に繋がる「英語力」の育成に向けて、小中一貫の取組を柱に研究を進めています。

2. 研究目的と視点

（1）研究目的

本研究の目的として、主に三点あります。

一点目は、平成28～29年度の英語教育研究グループが進めてきた研究の中で、最終的に残った次の3つの課題、

ア 評価の研究

イ 移行期教材を利用した、より実践的な授業づくり

ウ 小・中学校の9年間を見通した英語指導

について継続して研究を進めるためです。

二点目は、次期学習指導要領の本格実施に向けての重点課題である、

ア 英語でのやり取り

イ パフォーマンス評価

ウ 移行期教材の有効利用

の3点について先行して研究を進め、成果と課題を移行期の間に示しておき、次期学習指導要領の円滑な実施につなげていくことが必要だと感じたためです。

三点目は、小・中連携を意識した英語教育の在り方について研究を進めていくためです。今年度の研究員の中には、小学校英語リーダー1名、中学校英語コーディネーター2名、専科教員2名をはじめ、小・中学校の英語を専門とする教員が所属するため、より専門的な知識や実践力を生かしながら、小・中連携を意識した研究を進めていくことができると考えました。

(2) 研究の視点

こうした研究目的にせまるための研究の視点を三点設定しました。

1点目は、英語での「やり取り」についての視点です。新学習指導要領では、「話すこと」の領域において、「話すこと〔やり取り〕」、「話すこと〔発表〕」の2つに分かれました。この「やり取り」の活動に、多くの教員が難しさを感じていることが課題として挙げられます。具体的には、ある程度の即興性が求められるので、英語でのやり取りが続かない場合の手立てをどのように行うのかということに難しさを感じている教員が多いようです。さらには、文字として記録に残らない英語でのやり取りにおいて、評価をどのように行うのかについても難しさがあります。指導と評価の一体化という視点からも、これら2つの課題は表裏一体の関係でもあります。

2点目は、パフォーマンス評価についての視点です。第4章「研究の視点②」でも後述しますが、「パフォーマンス評価」とは、「知識やスキルを使いこなす（活用・応用・統合する）ことを求めるような評価方法。論説文やレポート、展示物といった完成作品（プロダクト）や、スピーチやプレゼンテーション、協同での問題解決、実験の実施といった実演（狭義のパフォーマンス）を評価する。」と定義されています（平成28年12月中央教育審議会答申『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策等について』）。「話す」「聞く」「読む」「書く」の4技能を統合した活動を評価することからも、活動に難しさを感じる生徒への手立てや、実演（スピーキング）や完成品（ライティング）を評価する工夫について、先行的に研究を進める必要性を感じ、研究の視点として設定しました。指導と評価の一体化という視点からも、一点目「やり取り」についてと共通の課題でもあります。

3点目は、移行期教材の利用についての視点です。小学校第3・4学年では『Let's Try!』、第5・6学年では『We Can!』の新教材が、市内小学校ですでに活用されています。第5・6学年については「外国語」の教科化に向けて、「書くこと」の指導や過去形による表現等、これまでの小学校英語では指導していなかった内容が入ってきています。小学校英語と中学校英語の段差を解消するための工夫については、本市でもこれまで課題として挙げられてきました。この移行期教材の利用を適切に行うためにも、研究グループとして先行的に実践しながら研究を進め、効果的な利用法について提案できればと考えました。

3. 平成30年度 研究活動経過

月	日	研究活動内容	内容
5	25	調査研究総会	研究委嘱式
5	25	第1回研究会議	研究活動方針検討（1）
7	9	第2回研究会議	研究活動方針検討（2）
8	6	第3回研究会議	研究テーマの決定 研究活動計画の確認
10	11	第4回研究会議	研究テーマにせまる取組の成果と課題について交流 英語教育研修・公開授業の指導案検討（1）
11	1	第5回研究会議	研究テーマにせまる取組の成果と課題について交流 英語教育研修・公開授業の指導案検討（2）

11	8	中学校英語教育研修	公開授業・研究協議 授業者：山田東中学校 教諭 岩田 将 指導助言：関西大学 教授 竹内 理
11	15	小学校英語教育研修	公開授業・研究協議 授業者：佐井寺小学校 教諭 和志武 玲子 指導助言：関西大学 教授 竹内 理
12	13	第6回研究会議	教育研究報告会の報告内容確認
1	7	第7回研究会議	教育研究報告会の報告作成とリハーサル
1	30	教育研究報告会	テーマ「小・中連携を意識した新学習指導要領における英語教育の在り方について」
3	8	第8回研究会議	年間研究活動まとめ（研究紀要作成） 来年度研究の方向性の確認

4. 研究の視点①「英語でのやり取り」

新学習指導要領では、外国語活動・外国語の目標に書かれている「5つの領域別の目標」のうち、「話すこと[やり取り]」について以下のように示されています。（下線太字は筆者）

小学校第3・4学年	小学校第5・6学年	中学校
ア 基本的な表現を用いて挨拶、感謝、簡単な指示をしたり、 <u>それらに応じたり</u> するようにする。	ア 基本的な表現を用いて指示、依頼をしたり、 <u>それらに応じたり</u> することができるようにする。	ア 関心のある事柄について、簡単な語句や文を用いて <u>即興で伝え合う</u> ことができるようにする。
イ 自分のことや身の回りの物について、 <u>動作を交えながら、自分の考えや気持ちなどを、簡単な語句を基本的な表現を用いて伝え合う</u> ようにする。	イ 日常生活に関する身近で簡単な事柄について、 <u>自分の考えや気持ちなどを、簡単な語句や基本的な表現を用いて伝え合う</u> ことができるようにする。	イ 日常的な話題について、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、 <u>簡単な語句や文を用いて伝えたり、相手からの質問に答えたりする</u> ことができるようにする。
ウ サポートを受けて、自分や相手のこと及び身の回りの物に関する事柄について、 <u>簡単な語句や基本的な表現を用いて質問をしたり質問に答えたり</u> するようにする。	ウ 自分や相手のこと及び身の回りの物に関する事柄について、 <u>簡単な語句や基本的な表現を用いてその場で質問をしたり答えたりして、伝え合うこと</u> ができるようにする。	ウ 社会的な話題に関して聞いたり読んだりしたことについて、考えたことや感じたこと、その理由などを、 <u>簡単な語句や文を用いて述べ合うこと</u> ができるようにする。

「基本的な表現」「簡単な語句」を用いて、「それらに応じて」「即興」で伝え合う力を育てる領域です。小学校では「動作を交え」「サポートを受け」ながらも、中学校では「社会的な話題に関して」伝え合うといった、伝え合う内容が自分のこと→相手のこと→身の回

りに関する事柄→社会的な話題と、徐々に広がりを持っていくことも特徴として挙げられます。

(1) 小学校第4学年 外国語活動の実践

小学校第4学年『Let's try! 2』「Lesson 5 Do you have a ～?」の単位では、自分の足りない持ち物を集めていくという借り物ゲームをしました。

1対1で自信をもってやり取りできるように、前段階での練習で単語と表現を覚えるようにしました。この練習では、教師の「Do you have a ～?」を聞き取り、言われたカードがあるときには「Yes, I do. Here you are.」、ないときには「No, I don't. Sorry.」と答えます。

キーワードゲームやかかるたゲームでは、言われた単語に反応して物やカードを取りますが、この練習では、言われた単語を聞き取って、あるかないかを判断し、適切な返事をする、というように少し考えないといけません。BGMのスピードを変えたりジェスチャーを加えたりすることで、変化をつけることもできます。

Questions and Answers 1	
Question	Answer
1 Are you from Suita?	Yes, I am.
2 Are you good at soccer?	No, I'm not.
3 Are you a Hanshin Tigers fan?	Yes, I am.
4 Do you have a cat?	No, I don't.
5 Do you like sushi?	Yes, I do.
6 Is your bike new?	No, it isn't.
7 Is your friend nice?	Yes, he (she) is.
8 What color do you like?	I like blue.
9 What music do you like?	I like J-pop.
10 What do you have in your bag?	I have a lunchbox.
11 What day is it today?	It's Monday.
12 How is the weather?	It's sunny.
13 What time is it now?	It's nine ten.
14 What time do you get up?	I get up at six thirty.
15 What time do you go to bed?	I go to bed at eleven.

(2) 中学校第1学年 英語科の実践

1年生で実践した帯学習インタビューのいろいろなやり方及びそれを活かしたスピーキングテストを報告します。

ポイントの1つ目は、長く会話が続けられることを目標に、毎時間段階をふんで、レベルアップしていくことです。このシートのように、一問一答からスタートし、その後、答えに1文追加する→その答えに対してリアクションの文を言う→1つの質問に対して会話をできるだけ長く続ける→少し単語を変えて質問をするなど、少しずつ負荷をかけていき、コミュニケーション力を身につけさせます。

ポイントの2つめは、スピーキングテストのやり方です。毎日の帯学習が身につけているかを測れるように工夫しました。インタビューシートを参考に、1回目のテストを作りましたが、全員が同じ質問にならないように、各項目からそれぞれ1つずつ質問をするようにしました。2回目のテストは生徒が質問を作ってできるだけ会話を続けるテストにしました。いずれも普段やっていることを測ることができるテストとなっています。

Question Sheet

A,B,C,D から、各1問

A

- ① What time do you get up?
- ② What time do you eat breakfast?
- ③ What time do you go to school?
- ④ What time do you have lunch?

B

- ① What time do you come home?
- ② What time do you watch TV?
- ③ What time do you eat dinner?
- ④ What time do you take a bath?
- ⑤ What time do you go to bed?

C

- ① Do you have a cat?
- ② Do you have a dog?
- ③ Do you play tennis?
- ④ Do you play soccer?
- ⑤ Do you play the guitar?

D

- ① What food do you like?
- ② What animal do you like?
- ③ What color do you like?
- ④ What sport do you like?
- ⑤ What subject do you like?

(4) 成果と課題

ア 小学校の実践

成果としましては、「借り物ゲーム」では、全員が単語を覚えて、ほしいものをたずねたり、聞かれたことにテンポよく答えたりすることができました。

課題としては、教師が尋ねて児童が答えるだけでしたが、児童が教師役をするなどバリエーションを変えることで、より表現を覚えることができるようになると思います。

イ 中学校の実践

成果としましては、帯学習を重ねていくうちに、即興性ととともに会話力を身につけることができました。今後は1分間スピーチにつなげていくつもりです。

課題としましては、教科書の語彙や表現だけでは限りがあるので、教科書以外の有効な単語や文を教えて、さらにコミュニケーション力を高めていきたいと思います。評価は教師間で、たとえば文法項目なら間違い1つならB、2つ以上ならCなど、綿密に打ち合わせてシートに記入しましたが、評価基準の徹底は必須です。

以上の実践を通して英語でのやりとりで大切なことは、評価まで見通した日々の活動を積み重ねることです。そうすることで、児童・生徒が自信をつけながら、コミュニケーション力を高めることができます。

loudness of the voice	A	B	C
pronunciation	A	B	C
fluency	A	B	C
grammar	A	B	C
class	NO.	name	

5. 研究の視点② 「パフォーマンス評価」

平成28年12月中央教育審議会答申『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策等について』の補足資料第1部『学習指導要領等改訂の基本的な方向性』に、「多様な評価方法の例」として、以下の3例が挙げられています。（下線太字は筆者）

児童生徒の学びの深まりを把握するために、多様な評価方法の研究や取組が行われている。

「パフォーマンス評価」

知識やスキルを使いこなす（活用・応用・統合する）ことを求めるような評価方法。

論説文やレポート、展示物といった完成作品（プロダクト）や、スピーチやプレゼンテーション、協同での問題解決、実験の実施といった実演（狭義のパフォーマンス）を評価する。

「ループリック」

成功の度合いを示す数レベル程度の尺度と、それぞれのレベルに対応するパフォーマンスの特徴を示した記述語（評価規準）からなる評価基準表。

「ポートフォリオ評価」

児童生徒の学習の過程や成果などの記録や作品を計画的にファイル等に集積。

そのファイル等を活用して児童生徒の学習状況を把握するとともに、児童生徒や保護者等に対し、その成長の過程や到達点、今後の課題等を示す。

新学習指導要領（中学校外国語）では、「指導計画の作成と内容の取扱い」について、以下のように示されています。

第2 各言語の目標及び内容等

英語 3 指導計画の作成と内容の取扱い

（１）指導計画の作成に当たっては、小学校や高等学校における指導との接続に留意しながら、次の事項に配慮するものとする。

イ 学年ごとの目標を適切に定め、3 学年間を通じて外国語科の目標の実現を図るようにすること。

さらに、解説編では、学習指導要領が示す目標に基づいて各学校が学習到達目標を定めることの効果についても、

- ・生徒にどのような英語力が身に付くか、英語を用いて何ができるようになるのか、あらかじめ明らかにすることができ、そうした情報を生徒や保護者と共有することで授業のねらいが明確になるとともに、生徒への適切な指導を行うことができる。
- ・「知識及び技能」の習得にとどまらず、それを活用してコミュニケーションが図れるよう、五つの領域にわたる総合的な資質・能力の育成を重視することが期待される。
- ・校内でも教師によって指導方法が大きく異なることがある中で、教師間で指導に当たっての共通理解を図り、均質的な指導を行うことができる。
- ・面接・スピーチ・エッセイ等のパフォーマンス評価などにより、「言語を用いて何ができるか」という観点から評価がなされることが期待され、更なる指導と評価の一体化とその改善につなげることができる。

と示されています。（下線太字は筆者）

中学校3 学年間での目標達成のためには、

ア 小学校や高等学校における指導との接続に留意すること

イ 学年ごとの目標を適切に定めること

ウ 授業のねらいを生徒や保護者と共有すること

エ 五つの領域にわたる総合的な資質・能力の育成を重視すること

等が重要であると述べられ、さらなる指導と評価の一体化とその改善につなげ、「言語を用いて何ができるのか」という観点から評価がなされる期待ができる評価方法として、「パフォーマンス評価」が具体例として挙げられています。

特にエの「五つの領域にわたる総合的な資質・能力の育成を重視すること」において、パフォーマンス評価がいかに効果的であるかと同時に、その課題についても整理しておくことが、研究を進める上でも重要なことであると考え、スピーキング活動とライティング活動において先行的に実践してきました。

（１）スピーキング活動

スピーキング活動は、実践的なコミュニケーション能力を高めるため、実技に重点を置いています。本年度は大阪府教育センターから提供していただいた「スピーキング力向上ツール」をもとに、豊津西中学校と山田東中学校の2 校で、テスト形式で実施しました。

A～D の4 つのパートがあり、それぞれのねらいは以下の通りです。

A：示された文を読み上げる問題

B：イラストから必要な情報を読み取り（聞き取り）問われている事に解答する問題

C：示されたイラストを説明する問題

D：自分の考えを説明する問題

これらをすべて英語で解答させます。

（２）ライティング活動

ライティング活動は、持てる知識で自分の考えや物事の様子を客観的にとらえて表現できる力を養うことを目的としています。定期テストのみで評価するのではなく、授業の中でもライティングにつながるように工夫することが必要です。例えば、ペアトークの内容を、書き取らせたりすることで継続的に生徒のライティング力を見ることが出来ます。

（３）中学校第２学年 英語科の実践

中学校第２学年「New Crown 2 Lesson 7 買い物をしよう」の単元では、買い物についてパートナーと会話し、積極的に買い物についての会話ができるようになることを目標としています。一見すると、リスニングとスピーキングのみの活動のように見えますが、スクリプトを読む活動と、スピーキングの内容を書き起こす活動も含まれており、結果的に４技能を統合的に高める指導計画となっています。評価については、成功の度合いを示す数レベル程度の尺度と、それぞれのレベルに対応するパフォーマンスの特徴を示した記述語（評価規準）からなる評価基準表である「ループリック」も示し、指導と評価の一体化をさらに高める工夫もしています。※巻末資料１参照

本市の英語教育研修の公開授業として行われた本実践は、英語教育研究グループのスーパーバイザーである関西大学教授・竹内理先生を指導助言者として招聘しました。竹内先生からは、

ア めあての提示・共有は非常に重要である。今回も「聞くことができる→表現することができる→書くことができる」と設定できればさらに良かった。

イ 英語での思考・判断・表現力を高める上では、「見方・考え方を働かせる」ことが重要である。本時では、場面（ショッピング）・目的（適切なプレゼントを選ぶ）・状況に応じて（１対１の会話）適切な表現を選び伝えるということである。

ウ ループリックは「何をポイントにチェックするのか」を明確にするためでもある。生徒にも提示し自己評価できるようにすることも重要である。

等、多くの指導・助言をいただきました。

（４）パフォーマンス評価のポイント

スピーキング活動は、英語でのコミュニケーションがとれているかが重要で、文法上正確な表現はもちろん必要ですが、必ずしも求められるものではありません。そこで、評価基準を複数用意して、生徒の実態に合わせて基準を設定する必要があります。例えば、解答が単語一つでもコミュニケーションが成立すれば、良い評価をあたえるという基準にすることも可能です。

ライティング活動もスピーキング活動と同様に評価されますが、日々のライティング活動のなかで、教師が丁寧に修正を加えることで正確な英文が作れるように指導することも重要だと考えます。

また、新学習指導要領を見据えて、即興的に表現する力を培うために、継続的にスピーキング活動やライティング活動を行う必要があります。

（５）成果と課題

パフォーマンス評価の成果としまして、スピーキング活動については、１年生の内容は概ね生徒は理解できる内容でしたが、未習事項も少しありました。２年生の内容は、英語に慣れ親しんでいる生徒は的確に答えることができていました。ライティング活動については、回数を重ねるごとに表現力を伸ばすことができていました。

課題としては、スピーキングテストについては、時間的制約を加えると、生徒からの柔軟な発想があまり見受けられませんでした。また、公平性を保つ意味では、一回だけに終わらず、複数回実施することが重要であると思います。ライティング活動については、苦手意識を持っている生徒は、自分の思うように書き進めることができないでいました。

テストという性質上伴う「制約」「公平性」についての課題や、苦手意識のある生徒への個に応じたより細やかな指導については、今後の課題として次年度以降も引き続き研究を進めていきたいと思っています。

６．研究の視点③ 移行期教材の利用について

次期学習指導要領では、「書くこと」「話すこと[発表]」の目標について以下のように示されています。（下線太字は筆者）

【書くこと】

小学校第５・６学年	中学校
ア 大文字、小文字を活字体で書くことができるようにする。また、 <u>語順を意識しながら音声で十分に慣れ親しんだ</u> 簡単な語句や基本的な表現を書き写すことができるようにする。	ア 関心のある事柄について、簡単な語句や文を用いて <u>正確に</u> 書くことができるようにする。
イ 自分のことや身近で簡単な事柄について、 <u>例文を参考に、音声で慣れ親しんだ</u> 簡単な語句や基本的な表現を用いて書くことができるようにする。	イ 日常的な話題について、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、簡単な語句や文を用いて <u>まとまりのある文章</u> を書くことができるようにする。
	ウ 社会的な話題に関して聞いたり読んだりしたことについて、 <u>考えたことや感じたこと、その理由</u> などを、簡単な語句や文を用いて書くことができるようにする。

【話すこと[発表]】

小学校第3・4学年	小学校第5・6学年	中学校
ア <u>身の回りの物</u> について、 <u>人前で実物などを見せながら</u> 、簡単な語句や基本的な表現を用いて話すようにする。	ア <u>日常生活に関する身近で簡単な事柄</u> について、簡単な語句や基本的な表現を用いて話すことができるようにする。	ア <u>関心のある事柄</u> について、簡単な語句や文を用いて <u>即興で</u> 話すことができるようにする。
イ 自分のことについて、 <u>人前で実物などを見せながら</u> 、簡単な語句や基本的な表現を用いて話すようにする。	イ 自分のことについて、 <u>伝えようとする内容を整理した上で</u> 、簡単な語句や基本的な表現を用いて話すようにする。	イ <u>日常的な話題</u> について、 <u>事実や自分の考え、気持ちなどを整理し</u> 、簡単な語句や文を用いてまとまりのある内容を話すことができるようにする。
ウ 日常生活に関する身近で簡単な事柄について、 <u>人前で実物などを見せながら</u> 、自分の考えや気持ちなどを、簡単な語句や基本的な表現を用いて話すようにする。	ウ 身近で簡単な事柄について、 <u>伝えようとする内容を整理した上で</u> 、自分の考えや気持ちなどを、簡単な語句や基本的な表現を用いて話すことができるようにする。	ウ <u>社会的な話題に関して聞いたことや読んだこと</u> について、考えたことや感じたこと、 <u>その理由</u> などを、簡単な語句や文を用いて話すことができるようにする。

外国語活動は、「聞くこと」「話すこと[やり取り]」「話すこと[発表]」「読むこと」「書くこと」の5領域を扱います。移行期の教材『We Can!』には、「話すこと[やり取り]」「話すこと[発表]」「書くこと」の活動で、ここで取り上げる「Sounds and Letters」等の活動が加わっていることが、前教材『Hi, friends』と違う点です。今回は、「Sounds and Letters」と「話すこと[発表]」について報告します。

(1) 『We Can!』 「Sounds and Letters」の活用

新教材『We Can! 1・2』には、どちらも「Sounds and Letters」という活動があります。「Sounds and Letters」は『We Can! 1・2』の各単元に組み込まれているもので、アルファベット読みだけでなく、音読みも学ぶことができる活動になっています。

音読みとは、アルファベット単体ではなく、単語として発音するときのアルファベットの発音のことです。音読みを学ぶことで、単語の発音がスムーズになり、文字指導にもつなげやすくなります。

『We Can!』 「Sounds and Letters」の活用のポイントは2つあります。1つめは、デジタルテキストの音声教材の活用や、AETに発音練習を行ってもらうことです。2つめは、文部科学省作成のワークシートの活用です。



写真は、ポインティングゲームを行っているところで、授業者が発音したアルファベットや単語を教科書の中から探して子どもたちが指さすというものです。



このような活動を通して、子どもたちが英語の発音と文字との結びつきについて学びを深める取り組みを続けています。『We

Can!』のデジタル教材の中には、音声教材がたくさんあり、ネイティブスピーカーの音声に親しむことができ、気軽に活用できます。

ワークシートに関してはアルファベットの発音練習をしながらその文字を書いていくという形で指導をしています。ワークシートは、文部科学省のホームページからダウンロードできますので、活用してください。

(2) 小学校第5学年 外国語活動の実践

小学校第5学年『We Can! 1』「Unit 5 She can run fast. He can jump high.」の単元では、自分や相手(I / You)のこと、第三者(He / She)のできること・できないこと(can / can't)について伝え合うことを目標としています。※巻末資料2 参照

本市の英語教育研修の公開授業として行われた本実践は、英語教育研究グループのスーパーバイザーである関西大学教授・竹内理先生を指導助言者として招聘しました。竹内先生からは、

ア スモールトーク(世間話)は、写真やイラスト、発表ソフトを活用することで、英語をしゃべるきっかけとなる。

イ 「He / She」は、「その場にいない人」であることが条件。本時では修学旅行引率で校内にいない教職員をうまく使い、児童にとって無理なく自然に考えられる場面設定ができていた。

ウ 「多くの先生」→「He / She」に分ける→「He / She」を示す、と段階をふみながら活動することで、自分でルールを発見することができていた。英語での思考・判断・表現力を育てる上では有効的な活動である。

等、多くの指導・助言をいただきました。

(3) スピーチ活動

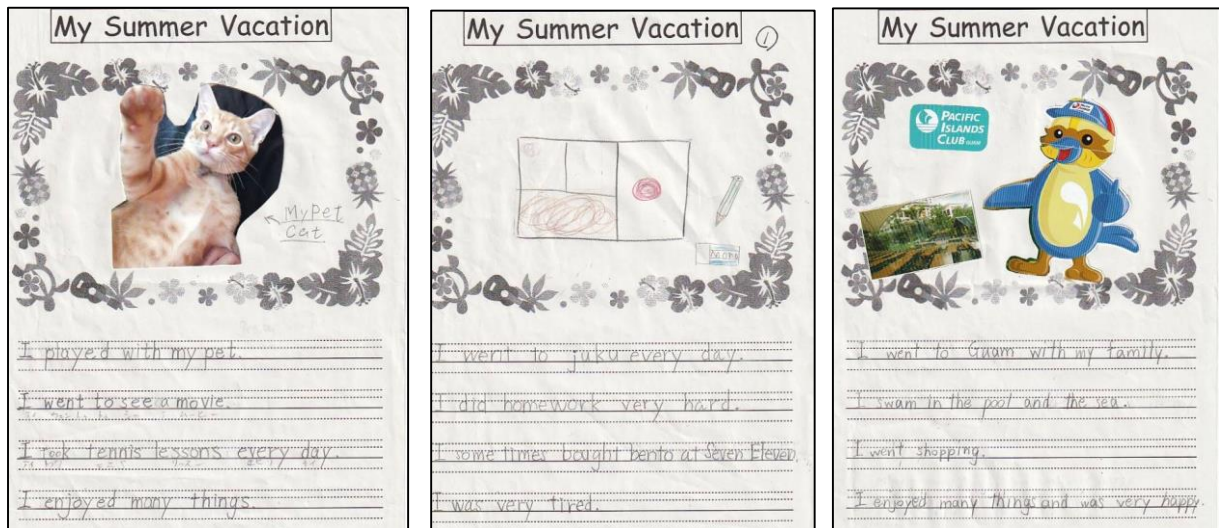
児童一人ひとりが実際に経験したことや感じたことについて、ありのままを英語で表現できるようにしました。そのため、例文リストを作成し活用しました。

示している例文リストの内容は、「日常」に関することです。他に、外出、買い物、食べ物、パソコンに関する表現も作成し、児童一人ひとりの実態に合った夏休みが英語でやりとりできるようにプリントにまとめて、配付しました。87文の例文を提示しましたが、実際に作成する中で、児童からは、リス

【My Summer Vacation リスト】		
1	日常	I did homework very hard.
2		I practiced the recorder.
3		I cleaned my desk.
4		I did some exercise every morning.
5		I walked my dog every day.
6		I washed the dishes after lunch.
7		I changed my hairstyle.
8		I studied kanji hard.
9		I read many kinds of books.
10		I read a lot of comic books.
11		I rode a unicycle in Minami-Senri Park.
12		I bought ~ on the net.
13		I had a birthday party.
14		I borrowed some books in the library.
15		I did a jigsaw puzzle.
16		I took care of my cat.
17		I watched cicadas in the park.
18		I rented some DVDs.
19		I watched comedies on TV.
20		I listened to English songs.

トにない内容についても言いたいことが出てきました。

スピーチ活動をするにあたり、1学期の最後の授業で、2学期に夏休みについての英文と絵や写真をつけたものを作ることを知らせました。児童はそうした活動の見通しを持ちながら、夏休みの間に写真やパンフレットなどの具体物を準備することができました。



(3) 成果と課題

ア 「Sounds and Letters」

成果としましては、3つあります。1つ目は、英語の発音と文字との結びつきについての学習に興味をもたせ、楽しく取りませることができました。2つ目は、アルファベット読みだけでなく、自然に音読みができるようになりました。3つ目は、繰り返し発音練習することで、英語らしい発音が身につきました。

課題としては、2つあります。1つ目は、『We Can!』のデジタル教材を活用するために、ICT環境整備の充実が挙げられます。2つ目は、指導内容の周知や実践例の紹介の機会を増やすということも課題として残りました。

イ スピーチ活動

成果としましては、2つあります。1つ目は、全員が自分の思いや考えを英語で伝えることができたということです。2つ目は、児童が次につながる達成感を持てたということです。「知らない単語を知ることができた。」「班やクラスの人々の夏休みが知れてよかった。」「英語で読むのは、難しかったけど、練習して読めたので良かったです。」「今日は、いつもより英語がはきはき言えました。良かったです。」等のような、前向きな感想を書いた児童も多くみられました。

課題としては、2つあります。1つ目は、リストの作成や児童のスピーチ原稿の点検にかなりの時間を要するということです。2つ目は、場面緘黙や難聴児童などの発表時にどのような支援ができ、どのように評価をするのかについてです。ユニバーサルデザインの視点を取り入れた英語の授業についても考えていく必要があります。

7. おわりに

今年度のいくつかの具体的な実践を通して見えてきた成果と課題をふまえて、次年度に向けて取り組んでいく研究の方向性は、以下の三点であると考えています。

(1)「話すこと[やり取り]」において、活動の積み重ねを通して「深い学び」につなげていくことです。そのためには、

ア コミュニケーションの目的や場面設定についてより確かなものにし、「何のために」やり取りをするのかを子供が意識し、主体的な学びにつなげること。

イ 内容に中身のある「意味のあるやり取り」にすること。

ウ スモールトーク（世間話）においては、リアクションにとどまらず、質問する力をつけることも大切にし、中学校での「即興性」にもつなげること。

等の取組が考えられます。

(2)「パフォーマンス評価」において、課題のある生徒への手立てをより充実させることです。具体的には、

ア 日本語もある程度認めつつ、「なぜ？」等問いかけながら、話す・書く内容をどんどん増やしていくこと。

イ わからない単語に丁寧に答えたり、作文添削を細めに行うことで、個に応じた指導を継続的に行うこと。

ウ 活動を継続的に行うことで「場慣れ」する生徒を増やし、難しい文章をいかに簡単に表現できるかをたくさん経験させること。

等が挙げられます。

(3)「移行期教材の利用」については、新学習指導要領に則った英語指導をより確かなものにしていくことです。そのためには、

ア 「思考する」場面を設定することで、どのように「思考・判断・表現力」を評価し、資質・能力を育成するのかについて

イ ICT 機器の活用を通じた、より効果的な新教材の利用の在り方について

ウ ユニバーサルデザインの視点を取り入れた英語の授業の在り方について

等の研究を進める必要があります。

新学習指導要領でのキーワードである「外国語活動の見方・考え方」「資質・能力の育成」「主体的・対話的で、深い学び」の視点を十分持ちながら、各小・中学校の教員の英語指導の指針となるような研究を、先述した3つの方向性をふまえて次年度以降も引き続き進めていきたいと思えます。